

2007年度 代表事業②

事業名 「しずおか未来学園」ファーマードリーム2007 委員会 友情育む実践委員会
次代創造～実りある未来のために～ 委員長：杉山 郁也

副委員長：佐藤 智昭
副委員長：柚木 隆志
幹事：鈴木 貴雄



友情育む実践委員会では、子どもたちに「感謝の大切さ」の心を育むこと、「友情」を育むことを目的とした事業を行います。集まった子どもたちが力を一つにし、仲間と作りあげる喜びを共有できる手法として、農作業を体験してもらいます。自分たちが食べている米や野菜が、どのように育てられ、そこにはどのような苦労があるのかを学ぶ事は、物があふれ、食べ物を残したり、捨てたりすることが当たり前になっている今の時代にはとても大切なことです。子どもたちが力を一つにして作物を育て、共に学びながら収穫に至るまでの過程をみんなの力で成し遂げることで友情を築き上げる事ができます。本事業を通じ子どもたちが苦楽を共にする事で、かけがえのない仲間へ「感謝」の心や友情を育み、協力して頂いたすべての人たちの、大地や水、食べられる事などに対しても「感謝」の気持ちを育む事業を実践し、わがまち静岡に広く発信していきます。

事業趣旨要約

私たちが幼少の頃よく遊んだ山や田畑。最近では地方都市部にまで住宅化が進み、空き地や交通量が少ない道路なども、昔に比べて少なくなりました。子どもたちは、物が豊富な今の時代、家にいれば遊具があり、自然に触れながら学ぶことも少なくなっていると思います。世間では、連日、いじめに関する事件が報道され、大きな社会問題となっています。この問題には様々な原因がありますが、個を尊重するあまり、皆で協働する機会が減り、子どもたちの絆が希薄になっていることが、いじめに関する問題の一つになっていると考えられます。子どもたちの心と心の繋がりや、共に力を合わせる事が出来る場を提供していくことが、現在の地域社会には、とても大切な事であると考えます。

- ・田畑の耕作を地域の方と協働し、共に苦楽する中で、仲間へ感謝する事の大切さを育むことができる。
- ・現代が物の豊かさに恵まれ、物があふれる生活になっている事に改めて気づき、物を粗末にしない心を学ぶ。
- ・作物を育てる事の大変さを学び、食物やその生産者、両親へ感謝の気持ちを再確認することができる。

「しずおか未来学園」ファーマードリーム2007 次代創造～実りある未来のために～

- 【入学式】
日時:2007年5月20日(日) 場所:静岡新聞社体育館 参加者:600名(JCメンバー120名) 内容:参加者同士の交流、班分け(野菜の選定)、保護者説明会、トウモロコシの種配布
- 【第1回 畑の授業】
日時:2007年5月26日(土) 場所:竜南雨坪公園 参加者:180名(JCメンバー60名) 内容:畑の耕作、野菜の定植、ドリロンピック、ドラム缶風呂
- 【第2回 田の授業】
日時:2007年6月3日(日) 場所:竜南雨坪公園 参加者:180名(JCメンバー50名) 内容:トウモロコシの定植、田植え、ドラム缶風呂
- 【第3回 学びの授業】
日時:2007年7月1日(日) 場所:竜南雨坪公園、東部公民館 参加者:170名(JCメンバー50名) 内容:大豆の定植、作物の収穫、DVD「学の夏休み」鑑賞
- 【第4回 地域交流会】
日時:2007年8月5日(日) 場所:竜南雨坪公園 参加者:200名(JCメンバー80名) 内容:作物の収穫、バーベキュー、かかし作り
- 【卒業式】
日時:2007年9月22日(日) 場所:静岡県立大学大講堂 参加者:600名(JCメンバー160名) 内容:記念講演、格闘家:角田信明氏 2007年度「しずおか未来学園」の奇跡
- 【第5回 稲刈りの授業】
日時:2007年10月7日(日) 場所:竜南雨坪公園 参加者:170名(JCメンバー60名) 内容:稲刈り、大豆の収穫
- 【第6回 大収穫祭】
日時:2007年10月14日(日) 場所:駿府公園、青葉公園 参加者:会場内1000名(JCメンバー120名) 内容:収穫大行進、未来学園の展示パネル、子ども市場、餅つき、1000人料理、大御所への献上

- <目的を達成した点>
 - ・苦手なものへ仲間と応援し合い克服する姿を見ることができた。
 - ・残さず食べるといった目標に対して真剣に取り組めた。
 - ・授業に協力する人たちの役割がなされていた為、それぞれに感謝の気持ちをおくることができた。
- <目的を達成できなかった点>
 - ・子どもたちの「友情を育む」にはもう少し踏み込むことができなかった感がある。
 - ・友情の度合いを計ることができなかった。

友情育む実践委員会では、子どもたちの心と心の繋がりや、共に力を合わせる事が出来る場を提供していくことが、現在の地域社会には、とても大切な事であると考え、農作業体験を主とする「ほのぼ農園」での事業を半年間に渡り活動して参りました。集まった子どもたちが力を一つにし、仲間と作りあげる喜びを共有できる手法として、農作業を体験してもらいました。「感謝することの大切さ」を学び、授業の合間に「友情」を育むことを目にする事ができました。長期間に渡り、数多くの授業を開催する事ができたのは、静岡青年会議所メンバーはもちろん、静岡市農協職員の皆様、JA青壮年部及びJA女性部の皆様、学生ボランティアの皆様、地元町内会の皆様など、本当に多くの「人」の支えがあったからこそだと思います。

所見

目的

- ・子どもたちの友情を育むこと。
- ・仲間へ感謝することの大切さを伝えること。
- ・物事に対し、本気で取り組む姿勢を身に付けること。
- ・全てのことに感謝する豊かな心を育てること。

事業概要

日時場所: 2007年4月12日から10月28日まで
参加人数: 静岡市内の児童200名程
事業実施場所: 静岡市内(竜南3丁目の畑、東部公民館、青葉イベント広場等)
事業総額: 4,465,805円

例会の流れ・目的



担当委員長Q&A

01 親として自分の子供を参加させたいくなる素直な内容ですが、当初からプランは決まっていたのでしょうか？
プランは全く決まっていませんでした。二人三脚⇒農業⇒子供市場⇒農業と紆余曲折がありました。

02 参加する子供たちの成長だけでなく、主催する側の学生ボランティアも有意義なものとなったようですが、事業に関わる方々すべてを巻き込み成功させた要因は何だったと思いますか？
「人」と「時代」に必要な趣旨だったからでしょうか。農協は少しでも子供たちに農業の実際を伝えたいけれど、一部の学校でしか出来ない現状があります。また大学生ボランティアは、座学やセミナー、教育実習以外で、子供たちと触れ合う機会の提供が必要でしたし、家庭では、土に触れあう機会がなく、楽しく農業体験や色々な経験出来る機会を欲していた現実がありました。

03 約半年間という長いスケジュールで取り組もうとした理由は何ですか？
趣旨が「何事にも感謝する気持ちを持つ」「子供たち同士の友情を育むこと」です。感謝や友情はよほどのことが無い限り、短期間でもてる感情ではないですね。また、手法（農業）が一夜漬けで出来るものではないこともありました。

04 長期間の事業で一番苦労された点はなんですか？
「人間関係」です。真剣であればあるほど、見解の相違もありますし、長い事業へのモチベーションの維持も大変だったと思います。そのため、長時間の会議を要することもありました。

05 事業の組み立てと実行していく中で、子どもたちの様子によって変更したことや再検討したことはありますか？
事業ごとに問題点を洗い出し、細かい修正点はその都度行いました。

06 子供たちに継続して参加してもらうための工夫は何かありましたか？
事業ごとに連動性を持たせました。第一回で種を配り、第二回で植える。その様子をブログで配信し、次回予定を手紙で送付するなど、連動性を常に意識しました。

07 各学校、PTAなどの外部に対してどのようなアピールが出来たと思いますか？
学校回りをしている中で、様々な意見があったと思います。ある意味、学校では難しいことを行ったのでアピールといった観点では、直接の感想をいただけておりませんし、その後のヒアリングも行っておりません。ただ、立ち上げから2〜3年で静岡青年会議所という名前、しずおか未来学園という名称の事業が浸透する為の一助になったのではないかと思います。

08 現在の「未来学園」についてどのような感想をお持ちですか？
卒業後ですが、実際の未来学園事業に参加しておりませんのでわかりません。ただ、この事業立ち上げから携わった一人としては、10年続く看板事業になった事が嬉しい限りです。余談ですが、長女が今年3年生ですので、今後事業に参加できる対象に近づいてきました。その時に親として、卒業生としてどんなふうに見えるかを今からとても楽しみにしています。

09 2007年当時、未来学園に参加してくれた子供たちは「今」どうなっていると思いますか？
また、どうなっていて欲しいですか？
今、どうなっているか・・・年齢でいえば、上は19歳、下は高校生ですから、どうなっているかを想像することは難しいです。どうなっていて欲しいという願望であれば、参加した楽しい思い出を心のどこかにひっそり持っていてもらいたいなぁ。欲を言えば、テーマが残さず食べることだったのでそんな子に育っていて欲しいと思います。



取材全体としてのまとめ・感想

事業の目的を達成するために、想定できる課題を洗い出し事前に解決することで、スムーズな運営ができたことと印象を受けました。

取材前後での特に気付いた点

長期間の事業のため、モチベーションを維持するのではなく、コントロールして事業を進めていたことを知りました。